

---

# 馬駆ける草原に、恋待星は昇りて。(旧作)

文樹妃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馬駆ける草原に、恋待星は昇りて。（旧作）

### 【Nコード】

N5961F

### 【作者名】

文樹妃

### 【あらすじ】

国を滅ぼされ、家族も殺された王女、麗凜<sup>れいりん</sup>は敵国に捕らわれ、最大の敵である王との結婚を強いられていた。婚姻も間近に迫ったある日、祝賀のために現れた小国の使者が、死んだはずの愛しい人にそっくりであることに彼女は驚愕する。果たして彼は何者なのか。（七夕企画に参加した時の作品。新人賞応募前、もともとの原稿です）

## 第一話

満点の星空を、あなたと見たあの日を忘れない。

今も心に残るのは、真摯な瞳と優しい微笑。

そして何度も夢に見るのは、あの恐ろしい、血の色。

あなたがもうこの世にいないなんて、もう二度と笑ってくれないなんて、まだ信じられずにいる。

この現実のほづが、夢であつたならどれだけいいか。

願つても、願つても……私は目覚める。

あなたのいない、孤独の中で。

\*

「おはようございます、姫様」

いつもと同じように声がかけてられて、麗凜れいりんはあわてたように頬に残った涙の跡を拭った。

寝乱れて貼り付いていた、黒く長い髪を乱暴にはらう。

寝台に起き上がった彼女の元へ、女官が水桶を用意し、朝の身支度が始められる。

丁寧に顔や足まで洗い清めてくれる女官たちの手つきを、麗凜はただぼんやりと見つめていた。

『姫』だなんて、もう失われた身分だというのに。

国も家族も、何もかもを失った彼女をまだそう呼ぶのは、一応の形式らしい。

あきらかに蔑んだ様子で呼ばれることも少なくはないのだが、身の回りの世話を買って出てくれている女官たちからは、皮肉めいた響きを感じることはなかった。

「昨夜は、よくお休みになられましたか？」

そう笑いかけてくれる女官にも、麗凜は曖昧な笑みだけで答えた。あの日から、よく眠れたことなんてありはしないのだ。

悪夢ばかりを繰り返して見ても、いまだに泣きながら目覚める。

そんな自分に、麗凜は苦笑していた。

それでもわずかな笑みを見せるようになった麗凜の様子に、女官はほっとしているようだった。

この宮へ連れて来られてから、既に半年　それだけの月日が経つても、数えるほどにしか言葉も発さず、最初は食事すらろくにとろうとしなかったのだから。

あの時、自分も死んでしまえばよかったのだ。

毎朝、この姿を見るたびにそう思う。

彼を失った悲しみは決して消えはせず、憎しみだけが自分を生かしているのだと、麗凜は豪華に飾り立てられた自分の衣装を、冷えた目で見ていた。

龍の刺繍が施された、赤を基調にした布地　この双龍国すうりゅうこくの伝統的な王族の衣装を着せられていることは、麗凜にとって、最大の屈辱に過ぎなかった。

それを恩赦であるとか、光栄に思えだとかのたまうこの国の官吏たちも、そしてそれを命じた張本人も、憎くてたまらなかった。

王宮に置いてもらえるだけで感謝すべきだと、声高々と言い渡されたあの時、舌を噛んで死のうとした麗凜を止めたのは、その張本人だったけれど。

「今日もご機嫌はいかがかな、麗凜よ」

鼻の下の髭を整えながら訊ねるのは、麗凜にとって、最大の敵と

も言える男だ。

この双龍国の王、双剣そうけん 麗凜の国も家族も奪った憎い男は、今日もいけしゃあしゃあと微笑んでみせる。

無表情のまま、何も答えないでいる麗凜を見て、いつものごとく渋い顔をする面々の中でも、双剣は余裕を失わずに笑っていた。

「そなたの美しい声を聞けるのはいつかと心待ちにしているこの私を、少しは喜ばせてはくれんのかね」

にやにやと、いやらしい笑みを向けられて、麗凜は思わずそっぽを向く。震えそうになる手を握り締めるのが精一杯だった。

「無理やりにも自分のものにできるのを、こうして待つてやっているのだぞ？ 寛大な私の優しさを、いつわかってくれるのだ」

唇を噛み締めて、赤色にあふれた王宮の装飾を睨みつける。

憎い、憎い、何もかもが憎い この赤い国も、傲慢な王も。

黙っている麗凜のもとに歩み寄った双剣は、細い顎に手をかけて、鮮やかな紅をひいた麗凜の唇をまじまじと覗き込んだ。

「わかつているだろうな そなたの命など、この私の思い一つだ。婚礼はもう半月後に迫っている。

拒否し続けることなど、不可能 もはやそなたの全ては、私のものだ。私を憎む、その瞳を受けながら……抱いてやるつよ」

耳元で囁いて、自らの唇を舐める双剣に、虫唾が走る。

ふん、と荒い鼻息を吐いて、自分の顎を解放した男を、麗凜は唇を噛み締めて睨みつけていた。

「麗凜様、お待ちください。そんなに走られては、草に足をとられてしまいますよ」

後ろから追いかけてくる自分の教育係に、麗凜は笑っていた。長い衣装の裾を持ち上げて走ってくる、彼のほうが転んでしまいそう

に見えた。

『周李しゅうりつたら、本当に心配性ね。大丈夫よ、草原だもの。たとえ転んだって、怪我なんかしないわよ』

ようやく追いついてきた周李は、朗らかに笑う麗凜の腕をそっと掴んだ。

『ほら、捕まえましたよ。麗凜様がお怪我でもされたら、私が怒られるのですからね。お転婆な姫君には、本当に困ったものだ』

叱るように見下ろす周李の瞳は、本当には怒ってなんかいないのがわかる。

だって、周李はいつも優しい　麗凜のすることを、大抵は多めに見てくれるのだ。

笑う彼の黒髪一束が、風に揺れる。文官である証とも言える長髪は、彼にとても似合っていた。

麗凜は舌を出して、その腕を逃れる。本当はそのままでしたかつたけれど、見惚れていたことに気づかれてしまいそうだったから。

『わあ……見て、周李！』

小高い丘に辿り着いて、一面に広がる風景を見つけた麗凜は、瞳を輝かせて振り返った。

優しく微笑んだ周李は、少し得意げに頷いてみせた。

『以前、警備の隊が教えてくれたんですよ。麗凜様が喜ばれそうだと』

こんな場所まで警備の隊が来るのだろうか　疑問に思いつつ、王宮の外れに位置する広大な草原を見つめていた麗凜は、思わず笑いが込み上げてきそうになった。だって、自分がこの風麗花ふうれいかが好きなのは、周李にしか言っていないことを思い出したから。

きっと、彼が見つけてくれたのだ　そんなことすら口にしない彼の控えめな性格が、麗凜は大好きだった。

見渡すばかりの風麗花　その鮮やかな黄色は、この峰陽国ほうようこくの国旗と同じ色だ。

山に囲まれて、平和を守ってきた祖国。峰の間から昇る、朝日の

輝きを意味する国の名前も、その名の通りに豊かで美しい大地も、全てが麗凜は好きだった。

峰を渡ってきた優しい風に吹かれて、そよそよと揺れる黄色い花々を、麗凜はいつしか微笑みながら見つめていた。

隣で佇む周李の気配を、心地よく感じながら。

いつまでも、彼とこうしていられたならいいのに　そんなささやかな願いごとが、十四歳の麗凜にとって全てだった。

ふと見上げた周李が、二つに結われた自分の髪を見ていたことに気づく。

『どうしたの？　周李』

彼の瞳に何か悲しげな光が宿っていたようで、思わず問いかけた麗凜に、周李はそつと笑みを浮かべた。

『いいえ　何でもありません。ただ、いつかは麗凜様もその髪を結い上げられる日が来るのだな、とそんなことを思っただけです』

この峰陽では、婚約と共に二つに結っていた髪を、一つに結い上げるのが慣わしとなっている。

周李の意味する内容に、麗凜は笑顔を消した。

『いやよ、そんなの　私は絶対に、お嫁になんか行かないんだから』

子供がだだをこねるような言い方になった自分の言葉に、周李は少し苦笑した。

『だめですよ、この峰陽のただ一人の王女様が、そのようなことを仰っては』

もちろん、そんなことはわかっている。いずれはふさわしい相手に嫁ぐこと　そして子孫を残して、この国を繁栄させること、それこそが自分に課せられた義務だということも。それでも、そんなことは考えたくもなかった。

だって　。

見上げた先で笑う周李は、いつものように優しい瞳をしていた。

また昔の夢。

寝台から起き上がって、麗凜は窓の外に目をやった。

既に日差しは初夏の装いを見せている。

まぶしいほどに輝く緑の木々も、麗凜の瞳には空しく映るだけだった。

外の世界がいくら美しくても、私は牢獄に捕らえられた身であることは変わらないのだ。

宮の外へ出ることは許されず、自分の部屋にあってもなお、誰かの目にさらされている。

いつ自殺を企てるかわからないと、細心の注意をはらわれた結果だという。

そんなにまでして、双剣は自分を手に入れようというのか。

もちろん、愛などという甘い感情は、あの男には持ち合わせ得ないものだ。

半年の月日を持ったのも、他の国との戦に忙しかったからであり、その間に完全に反乱の目を潰し、峰陽の再興を企てる残党がいなかを確かめるためであったに他ならない。

ただ、全ては国のため 自分の手で奪った国の王女を、万全の時を待つて妻にすることで、民にも見せ付けたいのだ。

峰陽という名の国が、完全に滅び去った事実を。

今でも目に浮かぶ父と母の最期の姿 母を守るように重なって倒れていた、父王の顔は無念の意に満ちていた。

むごい惨状に息を呑んだ麗凜の頭を掴んで、無理やりに見せ付け笑ってさえたのだ、あの男は。

絶対に許せない、彼の腕に抱かれるなどという屈辱は、何としても避けなければいけないというのに……。



この豪華な牢獄から、逃げることもすらできないでいる自分が情けなくて仕方なかった。

「姫様、少しも召し上がっておられないではないですか」

部屋に運ばれた食事を下げに来た女官に言われても、麗凜は顔を向けもせず俯いていた。

食事など、取る気にはなれないのだ。

こんな自分など、このまま消えてなくなってしまえばいいのに

。いつも考えずにはいられなかったその選択肢を、結局取ることができないでいる理由も、麗凜にはわかっていた。

夢を見ているのだ、自分は 万に一つの可能性でも、捨てきれずにいる。信じたくないのだ。

あの日、倒れた周李の背中を染めた、血の色を。

もしかしたら……そう思わずにはいられない。

闇に紛れて、生き延びてはいないだろうか。逃げて、どこかで無事ではないだろうか。

そんな風に期待せずにはいられないでいる。

だとしたら いつか、迎えに来てくれるかもしれない。自分を救いに来てくれるのでは……と、甘い夢を見てしまう。

同時にそんな馬鹿な夢を打ち消しながら、愛しい人の最期を思い出して涙に暮れながら、それでも生き延びている。

十五の年を迎えても、あの頃と変わらぬ自分の想いに苦笑しつつ、麗凜は深いため息をついた。

双龍国の女性がするという、一つに高くまとめられた髪型 まるで抜け殻の人形のような、鏡の中の自分を、麗凜はいつまでも睨みつけているのだった。

悪夢と、幸せな夢とは、紙一重だ。

だって、あの夜、人生で最高に幸せだった時間と、最悪の出来事とが重なってしまったのだから。

『陛下には内緒ですよ』

そう言つて周李が連れてきてくれた、真夜中の草原。

春には満開の風麗花が綺麗だったその場所も、冬の闇の中ではただ淋しく、広大な台地に見えた。

いつもは人の何倍も口うるさく、心配性な彼が一体どうしたのだろうと驚きながらも、わくわくする気持ちのほうに勝っていた。

風邪を引かないようにと毛皮の上着を着せられて、白い息を吐きながら、周李を見上げる。

『風と天気の関係で、今夜なら綺麗に見えるはずなんです』

博学な周李　いつも穏やかで冷静な彼が、珍しく少年のような瞳で夜空を見つめていることに、麗凜の頬も緩む。

そんな麗凜の腕を、周李が声を上げて引いた。

『ほら、見てください、あそこです！』

彼の指がさした方角を見て、麗凜も大きく目を見開いた。

『　　綺麗……！』

満天の星空に、丸く浮かんだ月　その隣できらきらと輝くのは、不思議な星だった。

黄色の月に寄り添うように光る、薄桃色の優しい星。

今まで見たことのない色合いに、麗凜はひたすら口を開けて上を見ている。

『それほど喜んでいただければ、私も嬉しいですよ』

そつとかけられた周李の声で、あわてて口を閉じる。赤くなる自分の反応を予想していたかのように、周李は優しく笑った。

『あれは、こいままらほし恋待星、というんです』

少しふくれかけた麗凜に、周李が笑顔で説明する。その名の響きに、麗凜は黙った。

『いつもは普通の白い星でしかないんですが　年に何度か、あの

ような薄桃色に染まる時がある。

その色と、月に寄り添ったような形から、恋待星と呼ばれるようになったそうです。恋しい相手を待ち続け、やっと巡り会えた時にだけ美しく染まる。そんな風に考えられているんですよ』

勉強の時間はあまり好きではないけれど、こんな風に周李が教えてくれる何気ない話には、熱心に耳を傾ける麗凜だった。

寒さも忘れるほどに、ただ星空を眺めている。そんな静かな時間を彼と過ごせるだけで、麗凜は心が満たされるのを感じていた。

『ありがとう、周李。こんなに美しく、素敵なものを見せてくれて……』

微笑みかけた麗凜に、周李はいつもの笑顔を返してくれた。

その瞬間だった。

遠くに見える王宮から、火の手が上がっているのを目にしたのは、寝静まっていたような辺りの空気が、どこか焦げ臭い匂いを伝えてくる。

目を合わせた麗凜と周李のもとに、息も絶え絶えにやってきたのは、馬に乗った兵だった。

あわてて近寄った麗凜は、自分たちを見とめるなり、ずりりと馬の背から転げ落ちた兵の姿に声なき悲鳴を上げる。

麗凜をかばうように前に出た周李は、味方の兵であることを確かめて、張りつめた顔で近づいた。

『どうした、何事だ！』

彼の問いに、わずかに瞳を開けた兵は、ほっとしたように口を開いたのだ。

『麗、凜様。よかった、ご無事で……どうか、お逃げください。』

双龍国の、奇襲が

『そこまで言っ、力尽きたように動かなくなった兵に、周李の顔が強張った。』

『麗凜様！ すぐに馬に 私がお守りします。どこか安全なところ……！』

二人で乗ってきた白い馬に、動けないでいる麗凜を強引に導いた周李は、いつもの穏やかな彼ではなかった。

国の危機なのだと、そう頭には浮かんだものの、どこかに実感がわかないまま、麗凜ははつと彼を見上げた。

『お父様とお母様が　ご無事かしら、私だけ逃げるなんて、そんなこと……！』

あわてて叫んだ麗凜を無理やりにも馬に乗せた周李は、強張ったままの表情で麗凜の手を握った。

『今はとにかく、麗凜様のお命を　一刻の猶予もございません！』  
そして、周李が自分の後ろにまたがろうとした、その時。

悪夢が起こってしまったのだ。

一瞬、周李のうめき声が聞こえたと思ったその時には、既に彼の体が揺らいでいった。

草原に倒れこんだ周李の姿に、麗凜は悲鳴を上げた。

『周李、周李！』

急いで馬を下りて駆け寄って、ようやく月光に照らされた彼の背中を見た。

鋭く突き刺さった矢の下から、赤く、鮮やかな血があふれだしていくのを。

『周……李』

一気に血の気が引いていくのがわかった。

足元が震えて、その場に膝をついてしまう。そんな麗凜の声に、苦しげに顔を向けた周李は、思うように動かないような手をなんとか持ち上げて、自分を探しているようだった。

『麗……凜様、どうか、お逃げに』

かすれた声がそう告げる。それでも麗凜は首を横に振った。

『いや……いやよ、周李』

こんなことが現実だなんて、認めたくない　そんな彼女の思いとは裏腹に、周李の背中に流れる血は増えていく。

矢を射てきた者らしき人物が、こちらを目指して近づいてくるの

が見えても、麗凜は動けずにいた。

暗闇の中、星空だけが自分たちを照らしている。つい先ほど、美しい恋待星の話に笑いあつたばかりだというのに。

『周李……目を覚まして、周李　！』

彼の体を揺すって、必死で叫んだ麗凜に、周李はゆっくりと笑みを浮かべる。いつもの優しいものではなく、悲しく、切なげな笑みを。

『麗、凜様　ずっと……お慕いしておりました。お守りできなくて　申し訳、ございません……』

最期の言葉が、ずっと待ちわびていたものだったなんて　。皮肉にもほどがあるではないか。喜ぶことも悲しむことも、何もできないまま、麗凜はいきなり羽交い絞めにされた。

いつの間にか背後から迫っていたらしい敵兵たちに捕らわれて、そして前方からやってきた騎乗の人物に、にやりと笑われたのだ。

『峰陽の王女よ　搜したぞ。さあ、ご両親のもとへ案内しよう』  
赤い旗を掲げた敵兵に半ば引きずるように連れられながらも、麗凜はただ一人の名を呼び続けていた。

愛しい彼の悲しい姿を、背後に残して　。

## 第二話

「お美しゅうございますわ、姫様」

そんな贅美の声も、麗凜にはわずらわしいだけだった。

婚礼の衣装だなんて、袖を通すのも汚らわしいものなのに、麗凜にとっては目にするのも嫌なその衣装を、女官たちはうっとりした顔で見つめている。

「双龍中の美を集めたといっても過言ではないほどのお衣装なんですよ。最高級の絹に、金糸の刺繍、それにこの大きな宝石、どれをとっても、双龍国の王妃様になるお方にふさわしい、素晴らしいものですわ。王陛下のお心遣いがおわかりでございましょう？」  
「赤く染められたその布地を、麗凜の体に合わせて整えている衣装係の言葉に、麗凜は頷くことができなかった。

ついに婚礼の日まで一週間となってしまったなんて、信じたくない。

昨夜の夢を思い出して、麗凜は瞳をかげらせた。

まだあんな夢を見てしまうほどに、悪あがきをしている自分。

周李が目の前で倒れたのは、変えようもない事実だというのに、これ以上何を待っているのだろうか。

周李は死んだのだ。自分の目の前で、あの憎い男の矢に倒れたのだ。

それがわかっていても、あきらめきれなかった。

最期になってようやく、彼も同じ想いでいてくれたことがわかったのに。

このままあんな男の妻になるなんて、絶対に嫌だ。

その日が来たら、自分で終わりにするしかない。

あきらめの悪い自分の命を、自分で終わりにしてやるのだ。  
決意を新たにする麗凜の前で、急に宮の外が騒がしくなった。

「どうしたの、何か？」

女官の中でも位の高い一人が、宮を守る衛兵たちに問いかけるのが聞こえる。

兵の一人が、ざわめきの中から答えた。

「新国の使者が、ご婚礼のお祝いの品を持ってきたとか　今、王宮のほうへ通されたそうですよ」

途端に興味を失った麗凜に、同時にやってきたのは王からの使者だった。

またいつものように婚約者としてお披露目されるのかと、ため息をついた麗凜は、別の衣装で飾り立てられる自分を他人事のように見ていた。

まさか、そんな気持ち駆けていた。

思わず呼んでしまいそうになった名前は、必死で喉の奥に押し込めて、麗凜は震える体をなんとか抑えていることで精一杯だった。

「双剣様には、ご機嫌も麗しゅう　貴方様の素晴らしい御名は、近隣国にも知れ渡っております。我らのような新参者との対面に応じてくださり、身に余る光栄でございます」

まさに社交辞令もいところの挨拶を口にのせて、膝をついた最高礼をとってみせたその人物　風彩国ふうさいこくからの使者だと名乗った男性に、麗凜の目は釘付けだった。

やわらかな瞳で、優しい笑顔を見せたその人は、ずっと夢にまで焦がれ続けていた愛しい人であったから。

自分の知る、峰陽国の文官に許された淡い黄緑色の長衣ではなく、身につけているのは濃紺色の衣服　乗馬に適した活動的な衣装であり、肩幅や体格も少したくましく感じられる。

そして何より、美しかった長髪が、短く切りそろえられているのが一番の違いだろうか。

それでも、優しい面立ち、整った長身、立ち居振る舞い、何もかもが、夢かと思うくらいにあの時倒れたはずの周李そのものだった。

周李　今にもそう呼んで駆け寄りそうになる足を、麗凜はその場に留まらせることで必死で、彼が双剣と何を話しているのかさえ、頭には入らずにいた。

かろうじて耳に残ったのは、風彩という国が、最近建ったばかりの騎馬民族の小国だということ。

広大な草原を駆け巡るといふ馬の民は、浅黒い肌をしていると教えてくれたのは、周李その人だ。

白い肌をした彼が、そんな国の使者だということに疑問を持ったのは、麗凜だけではなかったらしい。

「しかしそなたは　あまり騎馬民族には見えぬな。草原で一日を過ごす彼らは、浅黒い肌をしていると聞いていたが」

双剣の問いかけに、別段動揺も見せずに彼は答える。

「私の母は東の森の民でありました故、この白い肌も母ゆずりのものでございます。各地で商いなどをして過ごして参りましたが、騎馬民族であつた父の親族のもとへ身を寄せ、それから今までを草原で過ごしております。それでもなぜか、日に焼けても赤くなるばかりで、騎馬民族特有の肌色にはならないのでございます」

「ほう　それでは、相当優秀な人物であるのだな。他民族の血を持つそなたが、使者の役までこなすほどになったのだから」

あごひげを弄びながら、それほど深い意図もなく呟いたような双剣に、恐縮するように彼はひれ伏した。

「いいえ　騎馬民族は、もとより様々な部族の集まりでございます。私だけが特別なわけではありません」

そんな言葉にどうでもよさそうに頷いた双剣の前に、色とりどりの宝物が並ぶ。

途端に口の端を上げた双剣は、早速近寄って物色するように手に



取り始めた。

「こちらはささやかながら、我々の心よりのお祝いの品々でございます。どうぞ、お納めくださいませ」

「これはいい品物だ　特にこの宝玉の腕輪や冠など、我が妃にはぴったりではないか」

機嫌をよくした双剣が麗凜に視線をやるのと同時に、初めて彼が麗凜を見る。

心臓が止まりそうなほどに動揺した麗凜を目に、彼はただ静かに口を開いたのだ。

「初めまして、姫君　私は風彩国よりの使者、鳳昇（ほうせい）と申します。このたびは、ご婚礼まことにおめでとう存じます　」

そんな、そんな　一体何がどうなっているのだろうか。

宮へ戻ってからも、麗凜の心臓は治まらなかった。

手にびっしょりと汗をかいている。衣装を着替えた時に、女官に変に思われなかっただろうか。

何ともない顔をするのが精一杯で、女官たちが何を話しかけてきたかも覚えていない。

自分がぼんやりとしているのはいつものことだからと、疑問に思われていなければいいけれどー。

周李は、まるで初めて自分と会ったかのような瞳で見ている。

そして、その名を鳳昇と言う。風彩国という国から来た、まるで知らない人物だと。

そんな馬鹿な　他人だなんて思えない。あんなにそっくりで、何もかもが彼そのものだというのに。

確信を持って言えるのだ。細かい仕草まで、周李以外にはあり得ない。だって、ずっと彼を見てきた。ずっと想ってきたのだから。

ふとすれば荒くなる息を必死で整えながら、麗凜は陶器の水差しを手に取る。震える手で湯飲みに水をついで、飲み干してから気づいた。

女官が衣装を戻しに行った今のわずかな瞬間だけ、麗凜はこの広い部屋に一人だ。

使者が来ているからか、それとも婚禮の準備のためか、女官たちにも油断があるのかもしれない。

周李　鳳昇は、三日間の滞在を許されたと聞いた。

彼が帰ってしまう前に、何としてでも確かめなければ　それができなければ、こんな自分が生きている意味などないのだ。

半年間待ちわびた愛しい人が、生きて帰ってきたのかもしれないのだから。

いや、きっとそうであるに違いない　！

立ち上がった麗凜は、今まで開けたことのない部屋の扉を、決意を込めてそっと押したのだった。

これは幸運といえるのだろうか。

いつもなら女官たちが大勢いるはずなのに、偶然が重なったのか、誰にも見咎められずに麗凜は宮の裏庭へ出ることができた。

時折通り過ぎていく衛兵にも何とか見つからずに、低木の陰に隠れてやり過ごした。

けれど、いざここまで来てみて、どこへ行けば彼に会えるのかもわからないことに気づいたのだ。

こうなって初めて、ただ泣き、無気力に暮らしてきた自分に苛立ちさえする。もっと王宮の各宮の位置など、何か情報を得ることができていたなら　。

そんなことを今後悔しても始まらない。とにかく考えるのだ。使者が滞在するとすれば、どの辺りなのか。

こんなことが双剣に見つかったら、ただではすまされないだろう。それでもいい、彼に会うことができたなら　こんな命など、惜しくはないのだから。

低木の間にはしゃがみこんでいた体を起こしかけたその時、また通り過ぎていく衛兵の話し声が聞こえた。

「まったく、祝い事ってのは忙しくて仕方がねえな。明日もどこの国から使者がやってくるとかで、水龍宮は大忙しらしいぜ。

俺らにも警備の役が回ってくるし、倍働かせるんだからたまったもんじゃないよ」

「そうだよなあ。苦労すんのは俺らみたいなた下っ端だけで、双剣様からしたら、祝いの品でほくほくなんだろうけどな」

「違いねえ」

笑いあう彼らの言葉は、双剣の耳に入りでもすればただでは済まされないような内容だったが、麗凜にとっては天の助けも同様だった。

水龍宮　それなら、唯一聞いたことがある。いや、初めてこの王宮へ連れてこられてから、一度だけ見せられたことがあった。

豪華な造りの宮の前に作られた、絡み合う金の龍の口から水が流れるしかけを、双剣が自慢げに説明していた。

あれは確か、王宮の中央奥にあったはず　自分が閉じ込められているこの後宮内からだと、結構な距離だったはずだ。

果たして、辿り着けるのだろうか。

一抹の不安がわきあがるのを、麗凜は首を振って抑えた。

そんなことを言っている場合ではない。何としてでも辿り着くのだ、愛しい周李のもとに。

歩き出そうとした麗凜は、いきなり後ろから腕を引かれ、息を呑んだ。

暴れようとする体を、強い力で押さえつけられる。悲鳴を上げよ

うにも、大きな手で口もふさがれて声も出ない。

一体、誰が！

なんとか振り返った麗凜は、信じられない人物を目にして、息が止まりそうになった。

暴れるのをやめた麗凜に、ようやく抑えつける力を弱めた人物は、周李その人だったのだ。

「とにかくお静かに。このようなところで悲鳴を上げられては、どちらも危うい」

人差し指を口に当てて、素早く囁いた彼に、麗凜も素直に頷いた。やっぱり、自分を救いに来てくれたのだ。嬉しさに舞い上がりそうになる心を冷やしたのは、次に言われた言葉だった。

「先ほどお目にかかりましたね。双剣殿のご婚約者ともあるう姫君が、このようなところで何をしておいでです」

何を他人行儀な　そう返そうとした麗凜の腕を放して、彼は笑った。

「まあ、お互い様といったところか。不要な詮索はしないでおきましよう、こちらにも探られては困る事情があるのでね」

その声の響きも、にやりと笑った顔も、どこか冷たく感じる。

言われて彼の服装を見て、先ほどとは違い、黒一色の衣装で全身を覆い、口元すら布で隠しているのに気づいた。

「私のことは、他言無用に願いますよ。特に、双剣殿にはね　お命が惜しければ、利巧に生きられることだ」

それでは、と鮮やかにすら見える動きで、その場を去ろうとした彼の衣服を、麗凜はなんとか引いた。

「待って　あなたは……あなた、周李でしょう？　どうしてなぜ、他人のふりなんてするの？

私を救いに来てくれたんじゃないの？　なら、今すぐに連れて行

つて……私、ずっとあなたを待って　！」

感極まって涙すら浮かんだ麗凜の顔を、可笑しそうに彼は眺めた。  
「周李？　一体、誰のことですか？　どなたかと　勘違いされておられるようだが、私は鳳昇だ。風彩国から来た、単なる使者に過ぎない。」

残念ながら、あなたが待っておられるような方ではありませんよ」  
冷え切った瞳　かつて麗凜を映したあの優しい周李のものとは思えない、氷のような眼差しで射抜かれて、麗凜は言葉を止めた。

「さあ、誰かに見つかる前に戻られたほうがいい。くれぐれも、ここに私がいたことは内密に　話された時は、容赦なくあなたのお命も頂きますよ」

黒い衣装を翻して、後宮を囲む樹木の間が消えていく後姿を、麗凜は声もなく見つめていた。

どうやって自分の部屋に戻ったのかさえ、記憶にもない。

気づいた時には寝台に座り込んでいて、どれぐらいの間そうしていたのかすらわからなかった。

夕餉の用意をして現れた女官たちも、誰一人として何も疑問に思っていないような様子からすると、きっと誰にも見咎められずに戻れたのだろう。自分も、そして彼も　。

温かな食事も目に映さずに、ぼんやりとしたままの麗凜に声をかけたのは、女官の一人だった。

「あの　少しは召し上がらないと、お体に障りますよ」  
その声色が本当に心配そうだったことで、ようやく麗凜は振り向いた。

「ご婚礼までもう日がございません。万が一お倒れにでもなったら

……」

そう言ってみつめてくるのは、幼さの残る可愛らしい顔をした女官 確か、桃鈴とうりんとかいう名だったろうか。

その名を覚えているのも、あの夜周李が教えてくれた星の名を思わせるからに過ぎなかった。

「いいのよ、私など ipp そのこと、倒れたほうがよっぽどましなのだよ」

珍しく、本当に数えるほどの麗凜の返事を聞いて、桃鈴は一瞬驚いて、それから少し悲しそうな瞳をした。

「そのような 陛下がご心配なさいます」

「心配……」

その言葉を聞いて、麗凜はかすかに笑いすらした。その複雑な表情に、桃鈴は何も言えないようだった。

心配など、あの男がするはずはない。いや、するとすれば、自分の婚礼が先延ばしになることへの心配といったところか。

自嘲めいた笑みを浮かべた麗凜は、汁物をわずかに口にしながら、食事を下げさせた。

桃鈴の心配そうな瞳だけがなぜか心に残ったけれど、それすらもわずらわしく感じた。

どうということなのだろう。

周李 いや、彼は鳳昇という名の別人だとはつきりと自分に告げた。自分を救いに来たのでもなく、それどころか、冷たい瞳で切り捨てたのだ。

まさか、本当に別人だというのだろうか。

間近で目にしてもあんなにそっくりで、胸の高鳴りを抑えることもできぬほど やつと会えた、そう思ったというのに。

あんなに冷たくはねつけられてもなお、自分はまだ期待している。もしかして、何か事情があるのでは 別人のふりをしているだけで、本当は周李なのではないかと。

確かめるすべもないのだろうか。婚礼の日まで、一週間を切つて

しまった。彼が滞在するのも、あと二日。その間、自分はどうすればいいのだろうか。

考えれば考えるほど、混乱してくる。

きつと、と期待する心と、もしかして、そう不安に思う心とが交差する。

黙って待っているわけにはいかない。これが最後の、自分に与えられた生きる機会なのだから。

### 第三話

「何？ 風彩国の話を聞きたい、だと？」

朝の謁見で麗凜の言葉を聞いて、双剣はその太い眉を寄せた。

「そなたがやっと口を開いたかと思ったら、そのような願い事か？」

何を言い出すのか、そんな怪訝そうな双剣に、麗凜はできるだけ冷静を装って頭を下げた。

「婚礼の日まであとわずか、王妃となるには、幅広く知識を得ておくことも必要ではないかと思っただのです」

そう言った途端、双剣が驚いたような顔をした。

「それでは やつと、心を決めてくれたというのか？」

心を決めるも何も 無理やりに妃にされることは決まっていたではないか、と思う気持ちを抑えて、麗凜は微笑すら浮かべてみせた。

「はい、今まで、双剣様のお心の広さに気づかず、本当に私は愚かなことを……。これからは心を入れ替えて、婚礼の日を待ちたいと思っております」

すらすらと出てくる心にもない言葉に、自分で自分が恐ろしくなる。それぐらいに自然に言っただけだ。

これくらいは何ともない、そう、全ては周季に近づいたためだ。

「麗凜よ、そうか……！」

予想以上に嬉しそうな顔で立ち上がった双剣は、満面の笑みで麗凜の肩に手をやった。

「そなたがそう思ってくれるのなら、風彩だろうがこの国だろうが、話を聞かせてやろう。そなたの望みなら、何でも叶えてやろうではないか」

何度も肩を叩いて笑う双剣に、麗凜は鮮やかな笑みを返した。

「それでは早速使者をこちらに」



手を叩いて家来に合図をしようとする双剣の腕を、麗凜は引いた。「いえ、話は水龍宮でお聞きしたいのです。できれば、少数の供だけを連れて行きたいのですが」

「何だと？ なぜそのような……」

一転して疑うような目を向けてくる双剣を、安心させるように笑ってやる。

「王妃となれば、今のように自由な身ではいられなくなります。本当は、少女の頃から、世界中の色々な国の話を聞くのが好きだった私の、最後の我が俣を聞いていただけないでしょうか。」

騎馬民族の話を聞いて、彼らのように草原を駆け抜ける夢だけでもそつと見てみたいのです……お聞き入れいただけませんか、陛下

「できるだけしおらしく、両手を合わせて懇願してみせた麗凜に、双剣はしばらく無言でいた後、肩をすくめてみせた。

「まあ、よいだろう。愛しい妃の我が俣だ。王宮内なら危険もなからう」

婚姻を承知したことでの油断なのか、それとも疑いを残したままなのか、それでも機会が生まれたことに変わりはない。

麗凜の細い手に、満揚げに自らの唇を付けた双剣にも、必死の思いで愛らしい微笑みを作ってやる。

周李への願いが叶わぬ時には、自分がこの腕に抱かれることもないのだ。

麗凜はこの瞬間に、唯一の恋に命を懸けることを決意したのだ。

金の龍が陽光を受けて輝いている。

きらめく水がその口から流れていく様子を、麗凜は強い瞳で見つめていた。

きつくなってきた日差しも、水龍宮の中までは届かない。この静かな宮の一部屋には。

「姫様のほうからお訪ねいただけるとは、身に余る光栄でございます」

昨日の会話などなかったかのように微笑んでみせた周李、いや鳳昇に、麗凜も笑顔を返した。

まだ胸の鼓動が速まるのは、止められなかったけれど。向かい合って座った二人を見守るように、麗凜の女官が数人控えている。その中にいる桃鈴の顔を一瞬見やった後、麗凜は身につけた紅珊瑚の腕輪を掲げて見せた。

「こちらこそ、素晴らしいお祝いの品をたくさん頂いて、嬉しく思っておりますわ。特にこの腕輪など、一目見た時から気に入ってしまいましたもの」

昔自分がこんな口調で話をしたら、周李なら吹き出してしまっただろう。

そんな麗凜の言葉にも、鳳昇は何と言うこともなさそうに微笑んだ。

「それはそれは お気に召していただけたなら、我が王もご満足なされることでしょう」

短く切りそろえられた彼の髪を見つめながら、麗凜はわずかに瞳をそらして腕輪を撫でた。

本当はこんな宝飾品、大嫌いだ。草原を駆け回ったり、野の花を摘んだりして遊ぶのが好きで、いつも周李にたしなめられた。

やはり彼は、周李ではないのだろうか 今更わきあがるうとする不安を押さえつけて、麗凜は彼を見た。

いけない、こんなことでは。彼が周李でなかった場合のことは、まだ考えてはいけない。

「あなた方の王は、どんなお方なんでしょう？ 何でも、最近建ったばかりの国だとか」

麗凜の問いに、鳳昇は愛想笑いではないような、本物の笑みを浮

かべた。

「素晴らしいお方ですよ。少し悪戯好きの、子供のようなところがおありなのがたまに傷ですが」

王と近い者のように、鳳昇は笑う。単なる使者ではないような、どこか高貴な匂いすら漂ってくるようだった。

もし彼が本当に周李で、今は鳳昇という名で風彩国で生きているとしたら　一体それは、何のためなのだろう。

こんなにも自然に自分など知らないかのような顔をして、もしかしてあの時の傷が原因で、記憶でもなくしているのでは。

ふと浮かんだ可能性に気をとられていた麗凜を引き戻したのは、鳳昇の視線だった。

何かを見透かすかのような、まっすぐな視線　周李なら、どこかにいつも遠慮がちな、控えめなところがあつたのに……。

なぜかどぎまぎしてしまふ自分を叱咤して、麗凜は気を取り直したように笑ってみせた。

「きつと素晴らしい王様なのでしょね。私もできることなら、あなた方の国をいつか訊ねてみたいですわ」

ただの社交辞令に聞こえるように言いながらも、それは麗凜の本心だった。

こんな国で好きでもない相手の妻になるくらいなら、自由な騎馬民族の国で、一人で生きたほうが幸せなのに。

そんな彼女の心の声が聞こえたように、鳳昇は瞳を細めた。

「こちらとしては大歓迎ですよ。風彩国は、どんな民族でも同じ土地に住めば仲間だと認めている、自由な国ですから。

ところで姫君は　馬にお乗りになるのですか？」

「冗談めかしたように、初めて鳳昇のほうから質問されて、思わず嬉しくなる。

「まあ、これでも小さい頃から姫君らしくないと言われるほど、乗馬は得意なんですのよ」

そんなことは、周李なら百も承知の事実だ。それでも初めて聞く

ように、鳳昇は笑う。

「それは頼もしい 私よりもお上手かもしれませんね」

二人が笑いあったところで、桃鈴がお茶を煎れるために退出する。その時を待っていたかのように、麗凜は声を上げた。

「いけない……！ 陛下から頂いた首飾りが無いわ！ こちらに来るまでは、確かに身につけていたと思ったのだけれど………なくしてしまいでしたら、陛下に何とお詫びすればいいのかしら」

大げさかと思いつつも、困ったように立ち上がってみせたら、驚いたように残りの女官も席を立った。

「では、急いで衛兵を呼んで探させましょうか」

そう聞かれて、麗凜はあわててたように止めた。

「そんなことをして、万が一陛下のお耳にでも入ったら私……お願い、あなたたちでこっそり探してきて頂戴。くれぐれも、騒ぎにならないように」

言われて女官たちは、自分たちにも責が及んではいけないと思っただのか、素直に部屋を出て行った。

そして静まり返った水龍宮で、麗凜は打って変わって真剣な顔で、鳳昇に振り返ったのだった。

「さあ、これで二人きりになったわ」

麗凜の挑戦的とも言える言葉を聞いて、座っていたままの鳳昇は、ゆったりと足を組んでみせた。

「そのお言葉 誰かの耳にでも入れば、誤解されかねませんね」

余裕を失わない笑顔で見据えられて、胸が高鳴る。自分が知っていた彼は、こんな顔はしなかった。

でも不思議と嫌な気持ちはしない 何だっという、ようやく二人だけで話せる機会ができたのだから。

「誤解なんかより、知られれば困る事実があると思うのだけれど」  
できるだけ平静に言い返す。震えそうになる足は、長い衣装に隠れて見えはしないのだ。

「もしかして……昨日のことで、脅しにでも来られたのですか」  
あくまで冗談めかした言い方で、鳳昇は答えた。それでもその瞳が、少し剣呑な光を帯びたのがわかる。

彼の不思議な迫力に負けないように、麗凜は精一杯胸を張った。  
「そうね　そう思いたいなら、思ってもいいわ。そして私を殺すというのなら、どうぞご自由に。でもその前に……一つだけ確かめたいことがあるの」

「　案外と、気の強いお方ようだ。こちらとしても、今すぐにあなたを殺すわけにもいかないですしね。結構です、ご質問があるのなら、何なりとお答えしますよ」

周李　　本当なら、今すぐにもそう呼んで抱きつきたい。問い  
ただして、今までの気持ち爆発させて、泣きわめきたい。

会いたかったと、会えて嬉しいのだと叫びたい　けれど、ここまで他人のふりをするからには、彼にも何か事情があるに違いない。  
麗凜は先にそちらを確かめることに決めていた。

「あなたは、何をここにこへやってきたの？　双龍国を　　双剣の  
首でも取りに来たのかしら？」

誰かに聞かれでもしたらただではすまないだろう、麗凜の問いかけに、鳳昇は無表情のままじつと動かずにいた。

「嘘を言っても無駄よ　　いいえ、嘘なんかつく必要もない。だってそれこそが、私の望むことだから……」

ひとかけらの嘘も、感情の変化も見逃すまいと見つめる麗凜に、  
鳳昇はしばらくして、声を上げて笑い始めた。

「何よ……何がおかしいの！」  
馬鹿にされたような気分で思わず詰め寄った麗凜に、鳳昇は笑いながら両手を上げた。

「いえ、すみません。おかしくて笑ったわけでは　　気の強いも、

ここまで来ると見事なものだ。あなたには負けましたよ。本当のことを告白しましょう」

「鳳、昇　？」

つい呼んでしまったその名前に、彼はこれまで以上に余裕に満ちた笑顔を向けてきた。

「そうです。あなたが仰るとおり、私は双剣の首をとるためにこの国へ来た。正確には、私一人ではありませんが。どうです、ご満足ですか？」

予想はしていたものの、あっさりと肯定されて、麗凜は思わず言葉を失っていた。こんな風に認められるとは思っていなかったのだ。「あなたもそれをお望みなら、何の問題もありませんね。どうぞ、我々の邪魔だけはなさらぬよう」

まるで子供に諭すように言われて、やっと麗凜は彼の顔を睨みつけた。馬鹿にされるために、こんなことを聞いたのではないのだから。

「それなら、私と取引しましょう」

「取引　？」

意外そうに瞳を上げた鳳昇に、麗凜は頷く。

「そう、私が双剣を油断させて、彼の隙を狙いやすくするわ。そして、あなたの役に立つでしょう？」

そしてうまく行ったなら　私も連れて行って。あなたの国に自由な風彩の民に加えてほしいの」

どれだけ危険な取引かなんて、考えもしなかった。

とにかく鳳昇の　周李の役に立ちたい。そして願わくば、本当に彼と逃げる事ができたなら　そんな想いを込めた、麗凜の言葉。

鳳昇は、まるで人形のように固まっていてから、ゆっくりと、王も顔負けの威厳に似た空気さえ感じさせる微笑みで、麗凜を見返したのだった。

決行は、鳳昇の滞在最後の夜。

使者たちをもてなすための晚餐の席がもたれるその夜　当初から鳳昇たち風彩の部隊は、それを狙っていたという。

麗凜の役目は、双剣の酒に気づかれぬように薬を盛ること。

寝入った彼の寝所に押し入るのは、鳳昇たちの役。

あとのことは、ひそかに双龍国へ潜入している、風彩の部隊が行う。

素早く打ち合わせされたその事実を、信じられない気持ちで麗凜は何度も頭の中で復唱していた。

まさか、本当に自分が自分を認めてくれるなんて。手伝わせてくれるなんて、思いもよらなかった。

なぜもつと早くこうしなかったのだろう。危険をおかしてでも双剣の命を狙うことなんて、今までにだってできたかもしれないのに。

自分の命を絶つことばかりを考えて、憎い相手に復讐しようとは思っても付かなかった自分の弱さを、麗凜は口惜しく感じていた。

それでも今、こうして周李に会えて、万に一つでも彼に連れて逃げてもらえる可能性ができたのだから、きっと自分は生きていてよかったのだ。

彼が周李でなかったとしても、こんな国で望まぬ結婚をするよりは何倍もいい。

そして、彼が周李でなかったなら　双剣を殺すことさえできれば、自分は死んでしまったっていいのだから。

どちらの道に進むとしても、今のまま生きながら死んでいるような日々からは抜け出せる。

この双龍国で過ごしてきた半年の、長かった苦痛から解放されるのだと思うと、麗凜はようやく息をつける思いでいた。

お父様、お母様……待っていてください。私が、あの憎き男を葬ってみせます。この赤い国を滅ぼすために、命を懸けてみせます……！

鳳昇に渡された睡眠薬の包みをそつと胸元に忍ばせて、麗凜は眠りについた。

あの悪夢の夜から、初めてぐっすりと眠れた夜だった。

いよいよ晚餐が開かれる日の朝を迎えた。

いつもより早く目が覚めた麗凜は、訪れる女官たちにも機嫌よく接した。

先日の双剣との会話からも、すっかり婚姻を承知したのだと思われるらしく、女官たちも安心したように麗凜の世話をしていた。「ご機嫌がよろしいようで、何よりですわ。姫様」

桃鈴にそう言われたのは、朝餉をいくらか口に入れていた頃だった。

「食欲も出てこられたようで、本当にほっとしました。先日の、風彩の使者とお話になられたことで、元気になられたようですね」

裏も何もない桃鈴の笑顔に、麗凜はできるだけ優しく微笑み返してみせる。今、怪しまれては元も子もないのだ。

「そうね。陛下のお優しいご配慮のおかげだわ。それにあなたもありがとう、桃鈴。女官たちの中でも、あなたが一番私を気にかけてくれていたわね」

何気なく言っただつもりの麗凜の言葉で、桃鈴は嬉しそうに頬を染めた。

「まあ。姫君……初めて名を呼んでくださいましたね！ 勿体無きお言葉、有難き幸せにございます」

素直に言われて、麗凜は少し居心地の悪い気分になった。

全ては偽りの対応に過ぎないのに。夜が来れば、双剣を殺すために自分は動く。そして、その意味するところは。この双龍国を倒すことだ。

国を失えば、一番に被害を被るのは民であるのだ。何の非もない、



桃鈴のような人々が。

戦火に戸惑い、悲鳴を上げる彼らの顔が目には浮かんだ気がして、麗凜は思わず瞳を伏せた。

「どうかありませんでしたか、姫様？」

無邪気な桃鈴の声に、麗凜は固く瞳を閉じてから、思い直したように顔を上げた。

「いいえ、何も 何でもないので……」

そうだ、祖国を滅ぼされたのは自分のほうではないか。そんな国の人々に、何を同情するというのか。

迷いなど、必要はないのだ。全ては周李のために、そして自分の恋と命のために。

何度も胸に刻んだはずの決意を、もう一度繰り返して、麗凜は窓の外を見やった。

青い木々の葉が、何も知らずに爽やかな風にそよいでいた。

## 第四話

夜も更けて、続々と集まる各国の使者たちと、あふれるほどに並べられた豪華な料理で、水龍宮は賑やかに彩られていた。

食事を楽しむ彼らの前に披露される、踊り子たちの華麗な舞いと珍しい見世物で、宴も盛り上がりを見せている。

まさに贅を尽くした宴会は、使者たちの貢物に対する感謝をうたってはいるが、双龍国の力を見せ付けるためのものだ。

近隣を囲む国から訪れた彼らに対しての、牽制とも言えるだろう。そんな思惑が渦巻いているとはいえ、華やかな宴会は楽しげに続いていった。

「さあ、陛下　お酒をもっとお召し上がりくださいませ」

麗凜が進めた酒を、機嫌よく双剣は飲み干した。

酒瓶を持つ彼女の手が少し震えていたことなど、既に赤い顔をした双剣には見えていないようだった。

宴が始まる前に、周李にもらった薬を入れたその酒　誰にも気づかれず双剣が無事飲んでくれて、麗凜はほっとしていた。

これで　これで彼は、そのうち眠ってしまうはず。

そうすれば、寝所に周李たちが押し入った時、簡単に殺せるのだ。彼の寝所を守る衛兵たちにも、周李の他の手勢が薬を盛る手はずとなっていた。

もうすぐだ。もうすぐ、この憎い男の命は消える　！

いざその瞬間が迫っていると思うと、麗凜は体中に震えが走るのを止められなかった。

しかし、いつまでたっても双剣は、眠そうな様子一つ見せなかった。

おかしい……そろそろ薬が効いてもいい頃なのに。

麗凜が疑問に思うのも露知らず、双剣は平気な顔で使者たちと雑談を交わし、酒を飲み干し続けている。

不安な面持ちで麗凜が視線を送るのは、宴に同席している鳳昇の顔。こちらも、まるで何事もないかのように平静な表情を崩してはいなかった。

もしや薬が効かなかったのだろうか。そんな麗凜の動揺は、宴が終盤を迎える頃には頂点に達していた。

そんなこのままでは周季が寝所に忍び入った時、万が一にも返り討ちにされるかもしれない。双剣という男は、蛇のように油断のならない男なのだ。

そう思った途端、麗凜は恐ろしくてたまらなくなった。

いやだ、またあの悪夢が繰り返されるなんて

目の前で繰り広げられた惨劇が頭に浮かんで、麗凜はたまらずに双剣の腕を掴んでいた。

「どうした、麗凜よ。顔色がよくないようだが」

麗凜の真つ青な顔色に気づいたように覗き込んでくる双剣。その瞳を必死で見上げて、麗凜は口を開いていた。

「陛下　あまり気分が優れません。非礼であることは承知の上で  
ごさいます……宮に下がらせて頂きとうございます」

抑えきれない手の震えを、双剣は言葉通りに取ったらしく、あわてたように頷いた。

「そうか、構わぬ。下がるが良い。誰か、麗凜を宮に」

近くにいた女官に命じかけた双剣の手を、麗凜は素早く握った。驚いた顔で振り返った双剣に、麗凜は声をひそめて囁いたのだ。

「いえ　後宮ではなく、陛下の寝所に……」

見る見るうちに双剣の表情が変わる。酒のために少し染まった頬で、寄りかかるようにして告げた麗凜の言葉の意図は、間違いなく伝わったようだった。

黙って女官に何事かを指示した双剣は、上機嫌で使者たちに宴の終わりを告げる挨拶を始める。

双剣に連れられていく麗凜が一瞬だけ見やった先で、鳳昇は氷のような硬い表情のまま、静かに見つめ返しているのだった。

初めて入った双剣の寝所　寝台を灯すわずかな光だけ残された部屋は薄暗く、静か過ぎるほどだった。

衛兵も女官も下げられたことは、今からやってくる鳳昇たちにとっては都合がいいはずだ。

我ながらうまくやったと思う反面、万が一鳳昇が来なかったらそう考えると、心臓が縮まる思いだった。

「麗凜よ、もっと近くへ」

そう言いながら、自ら衣装の腰紐を緩める双剣の手つきと、自分を見つめる瞳に、心底から嫌悪感が走る。

どうしよう、本当にこんなことをして……無事で済むのだからうか。

鳳昇が来るのが少しでも遅れたなら、もう自分はこの男の毒牙にかかることになる。

避けられずに寝台に腰を下ろした麗凜のもとへ、双剣は歩み寄ってくる。

高く結い上げられた麗凜の髪　束ねていた赤い髪飾りを外されて、黒く艶やかな流れがあらわになった。

「この時を待っていたぞ　愛しい麗凜」

首元に唇を押し付けられた時、麗凜はどうしようもない恐怖で動けなくなった。

いや……いやだ。こんな男に触れられるのは……！

今まで必死で演じてきた『女』の仮面が、本能的に外れていく。いくら婚姻が許された年であるとはいえ、まだまだ麗凜は幼い少女でしかなかった。

愛しい人のために、全てを覚悟して臨んだはずの演技も、何も考

えられなくなった。

「いや やめて……離して！」

突然叫んだ麗凜に、双剣は瞳を見開いた。それでもすぐに、気にもせぬように彼女を押し倒したのだ。

「今更何を……誘ったのは、そなたのほうだろう。もう遅い いくら抵抗しようと無駄だ。この部屋には誰も近づけぬようにしたからな。哀れな麗凜よ 何を泣く？」

恋しい男のために必死だったようだが、あきらめるのだな。既に手は打った 風彩からの使者には刺客を差し向け、無事にこの王宮を出られるようにしておいた」

「そんな……！」

たちまち顔色を変えた麗凜を冷たい目で見据えた双剣は、ふんと鼻で笑ってすらみせた。

「この双剣が、小娘の演技ごときに騙されるような愚か者だと思っただか？ 半年の間、何に対しても無反応だったお前が、風彩の使者には執着を示した。それが何を意味するのか、考えるまでもなかったわ。あの夜、私が射抜いた男であろう、お前が待っていたのは。さすがに顔は覚えていなかったが、お前の反応で察した。だからあの男を調べさせ、泳がせておいたのよ。

残念ながら、あやつがどのような人物かは調べがつかなかったが、お前の恋しい男と同一人物かどうかなど、今更どうでもよい。怪しい動きを見せる輩は始末する。

それが王者の鉄則だからな 泣いてもわめいても、あやつは来ぬぞ。今頃は既に息絶えているころだろうからな お前が愛した、あの男のように」

言い捨てて、高らかに笑った双剣を食い入るように見つめて、麗凜はただ、首を振っていた。

「そんなこと 嘘よ……そんな、ひどい」

何を呟いているのかさえ、わからない。涙で視界がぼやけて、迫ってくる双剣の顔が見えなくなった。

うまく働かなくなった頭よりも先に、衣装が裂かれる音と押し掛かっってきた双剣の体重に、体が反応した。

「いや……助けて……周李　！」

声の限りに麗凜が叫ぶのと、鍵がかけられていたはずの寝所の扉が力いっぱい開くのが同時だった。

顔を上げた双剣の前に静かに剣を向けたのは、待ちわびていた愛しい人だったのだ。

「お前は……そんなはずは！」

あきらかな動揺を見せた双剣に、鳳昇はおどけたように一礼さえしてみせた。

「残念ですが　こちらも簡単に死ぬわけには行きませんのでね。差し向けられた方なら、私の仲間がその辺に転がしておりますよ」にやりと笑った彼の顔を、双剣は憤怒と共に睨みつけた。

寝台の枕元に忍ばせておいたらしい剣を素早く取るうとした双剣の動きを、鳳昇は見逃さなかった。

流れるように先回りして、双剣の腕を手にした剣で打った。そのまま髪をいれずに彼の喉元へ、光る切っ先を突きつけたのだ。

「ご覚悟を　もし抵抗なさらないと仰るなら、命だけは取りません」

冷静にそう言われて、双剣はゆっくりと鳳昇を見やった。

「何が　望みだ」

かすれた双剣の声に、鳳昇は微笑を浮かべる。

「もちろん、この国です。血を流すのはできるだけ避けたい　無駄に民や兵の命を落とすことは好ましくありませんからね。」

あなたが大人しく応じてくださるのなら、属国として、あなたの処分はできるだけ考慮してもいいと、我が王は申しております」

鳳昇の言葉に、双剣はたちまち乾いた笑いをもらした。

「何だと？ 新参の小国ごときが、この双龍を属国とするだと？ 随分大きく出たものだな。例え私の命を取ろうと、我が軍がお前たちのような小国など、すぐに蹴散らすだろうよ。」

喉元に突きつけられた刃も気にせぬように、双剣は嘲りを隠そうともせず笑い声を上げた。

それでも鳳昇は、気にした様子もなく笑い返してみせたのだ。

「さあ、それはどうでしょうね。あなた亡き後、果たして軍が忠誠を尽くすかどうか、私には疑問ですが。民がどちらを選ぶのか、我が王の度量に懸けるとしましょう。」

いずれにしろ……ご自身が亡くなられた後の心配は、なさらずともよいのでは？」

穏やかにすら見える微笑を瞬時にして凍らせて、鳳昇は剣を両手で持ち直した。今にも双剣の喉を突きそうなほどの、恐ろしい気迫が見えるようだった。

ゆっくりと、双剣の喉が上下する。

時が止まったような寝所の空気を動かしたのは、窓を揺らす夜風の音だった。

双剣が、気迫に負けたかのように瞳を閉じたのだ。

「わかった……私とて、命は惜しいからな。そちらの言うことに応じよう。」

再び開けられた時、ずる賢く光った彼の瞳に、麗凜は眉を寄せた。

やはり、この男はその程度の男なのだ。人の命はあれだけ残忍に奪っておいて、いざ自分の番が来たら、必死で生き残るつもりなのだから。

改めてわきあがる憎悪の中で、麗凜はそれでもほっとしていた。

これで、鳳昇の命に危険は及ばない。無事に目的を果たしたのだ。この男を殺せなかったのは残念でも、双龍という国は滅びるのだから。

胸をなでおろす麗凜の前で、鳳昇も剣を下ろした。

懐から取り出した縄で彼を縛り始める鳳昇の表情も、幾分安心したように見えた。

そして縛り終えた鳳昇が、その瞳をわずかにそらした瞬間だった。どうやって解いたのか縄のゆるんだ隙に、双剣が一瞬の動きで、枕元の剣を掴み、鳳昇の背に切りかかったのだ。

鳳昇の衣服が裂け、血が飛び散る。まるで月のような形の刃の跡が、見開かれた麗凜の瞳に映った。

「周」

叫ぼうとしても、まともに声を出すこともできない。喉に張り付いたような麗凜の悲鳴は、彼がゆっくりと倒れてから初めて、部屋を切り裂くように響いた。

「嘘……嘘よ、こんなの 周李……いや！」

麗凜の嘆く声にも、双剣は嫌らしい笑みを浮かべたのだ。

「は……はは、そら見たことか。せいぜい卑しい輩など、この程度のものなのだ。わかっただろ、麗凜」

固まっていた体をなんとか動かして、倒れた鳳昇のもとへ駆け寄った麗凜に、双剣は勝ち誇ったような声で言つてのける。

見下ろしている双剣を、麗凜は震えながら睨みつけた。

「よくも……よくも、周李を！許さない、絶対に……！」

咄嗟に鳳昇の剣を手にとって、立ち上がった麗凜を見ても、双剣は眉一つ動かさなかった。

「剣の扱いなど知らぬ小娘が、私を殺すことができると思うのか？  
できるものなら、やってみるがいい！」

笑いながら叫んだ双剣に、麗凜が憎しみに燃えた瞳で切りかかるうとしたその時。

扉が開いて、一気になだれ込んできたのは、双龍の衛兵たちだっ



た。

赤一色の鎧に身を包んだ彼らが現れたのを見て、双剣は安心したように息を吐く。

思わず振り上げた剣を下ろした麗凜を突き飛ばして、双剣は兵たちのほうへ歩き出した。

「遅かったではないか。この男を早く連れて行け！ それにこの女もだ。婚礼まで、一步も外へ出さなと皆に命じておけ」

顎で麗凜のほうを示した双剣が、兵たちの間を通ろうとして、驚いたように動きを止めた。

「何だ……お前は」

赤い兵たちの間、中央にいつの間にか佇んでいた人影に、麗凜も目を上げる。

そこに見つけた人物に、双剣は怪訝そうな目つきで、気が抜けたような顔をした。

「お前は確か 麗凜付きの……このような所で、何をしておる」  
そう、そこに立っていたのは、まぎれもない麗凜の女官、桃鈴だったのだ。

いつもの衣装で、艶やかにさえ見える微笑みを返した桃鈴は、その懐から、静かに光るものを取り出した。

そして目にも見えぬほどの素早さで、双剣に飛び掛った そう思った瞬間、双剣は倒れていた。

苦悶の表情すら浮かべられなかったのか、双剣は間の抜けた顔のまま全身を血に染めて、息絶えていたのだ。

息を呑んだ麗凜の前で、桃鈴はいつもの顔で振り返り、いたずらっぽい笑顔を浮かべて、自分の衣装を一気に剥ぎ取って見せた。

女官の服の下から現れたのは、青い鎧。そして彼女がおもむろに手をやった長い髪の下から、短く切りそろえられた褐色の髪が姿を現す。

鬢らしき髪を床に投げ捨てた桃鈴は、今までより少し低めの声で笑ったのだ。

「もうよいぞ、鳳昇。いつまでも起き上がらぬなら、死んだものとみなして捨て置くが、それでもよいか」

あっさりと言われたその内容に、麗凜が弾かれたように振り向いた目の前で、ゆっくりと鳳昇は立ち上がる。

何でもなさそうな顔で笑った彼は、桃鈴に一礼さえしてみせたのだ。

「ひどいことを　できるだけ楽しませてくれと仰ったのは、あなたではありませんか。風鳴様<sup>ふうめい</sup>」

「そうだったかな。過ぎたことはすぐ忘れることにしているんでね。彼らのやり取りに、背後の兵たちからも笑い声上がる。兜<sup>かぶと</sup>を上げた彼らの素肌が、浅黒いことに気づいて、麗凜はいよいよ手にしていた剣を落とした。

その甲高い音に振り向いた桃鈴　風鳴と呼ばれた彼女、いや彼なのだろうか　が麗凜に笑いかけた。

「そうそう　彼女が、すっかり驚いた顔をしているぞ？　説明はお前の役目だったろう、鳳昇」

あくまで楽しそうに鳳昇に言つてのけてから、風鳴は麗凜に片手を差し出した。

「ご紹介が遅れて申し訳ありません　僕は風鳴。及ばずながら、風彩国の王なんてものをやっております」

「王、ですって　？」

信じられないままに呟いた麗凜に、風鳴は子供のような瞳を細めて、彼女の手を握ってみせたのだ。

「驚かせてしまいましたわね　姫様」

最後は女官だった頃の声音まで再現して、風鳴が声を上げて笑う。その姿を可笑しそうに眺めている鳳昇と兵の前で、ついに麗凜は意識を手放したのだった。

## 最終話

がやがやと何か話し声がする。

うつすらと目を開けた麗凜は、ぼんやりしたまま行きかう人々を見ていた。

まだ辺りは薄暗く、夜は明けていないようだ。

少し肌に風が吹きつけてきて初めて、自分が外にいたのがわかった。

野外に張られた天幕のようなところで、笑いあっているのは、浅黒い肌の人々。

それでようやく目が覚めた。

「ここは？」

あわてて起き上がった麗凜に、にこやかに近寄ってくる兵のような面々。

「ああ、お目覚めになりましたか。大丈夫、ご安心を。ここは王宮の外に張られた天幕です。もう何もご心配なさることはありませんよ」

知らない男の言葉で頭に蘇ってくるのは、先ほどまでの出来事。

倒れた双剣、そして倒したのは。

「戦は……?」

混乱したままに呟いた麗凜は、ふと見回した視界に、どこかで目にした顔が見えることに気づいた。

「あなたたちは……確か、祝いの席にいた」

そう、よく見ると、兵たちに囲まれて笑っているのは、他国からの使者として宴に並んでいた顔ばかりだったのだ。

どうなっているのかと瞳を瞬かせた麗凜に礼をして、彼らは微笑んだ。

「我々は、この双龍を囲む国々からやってきた者です。風彩の風鳴殿とは、前々から同盟を結んでおりましてね」

「そうですね、更に言うと、双龍の民の中にも、我々の手の者が潜入済みでして、王宮さえ落とせば、双龍の民には手出しせぬと 既に自由民として解放してありますよ」

「まったく 風鳴殿には驚きですよ。この国を、ほとんど血も流さずにその手の下に置かれたのだから」

「いやいや、実際には自由国として建たせようと、あとは民の自由にするというのだから、支配下というのとは違いますぞ。圧政に苦しめられていた民は、かえって喜んでおるそうです」

黙っている麗凜をよそに、楽しげに語り合う各国の男たち。

その会話を聞きながら、ようやく麗凜は納得しはじめていた。

双剣を倒す計画は 既にそんなに前から周到に用意され、万全を期したものだということか。

風鳴という、まるで少女のような幼い彼が、そんなにも素晴らしき王であつたなんて。

女官として側に仕えられながらも、何一つ気づかせなかつた彼に、麗凜は驚きと共に笑みすら浮かんでくるのを感じていた。

そして気づくのは、その場に風鳴も周李も見当たらないということ。

「あの……風鳴王は？ それに 周……鳳昇という名の人はどこに？」

そう訊ねた麗凜に、彼らは一瞬笑みをおさめて口を開いた。

「あのお二人なら、もう発たれましたよ。あなたのご身分は解放され、既に自由の身であるだけ伝えてくれと」

途端に顔色を変えた麗凜は、急いで立ち上がった。そしてようやく気づいたのは、自分の肩にかけられていた、黒い上着。

背中に切り裂かれた跡の残るその衣服が、間違いなく先ほど鳳昇が身につけていたものだとかわかって、麗凜は唇を噛んでいた。

「麗凜様 ？」

それでもまだ、敬った呼び方をしてくれる使者の一人に、麗凜は詰め寄った。

「馬を　馬を用意して下さい、今すぐに！」  
天幕にいた全員が、麗凜の言葉に静まり返った。

天高く昇った大きな月。

満天の星空と、優しい月光に導かれるように、麗凜は馬を駆った。  
教わった通りに、ひたすら東へと進む。

邪魔になる王女の衣装は脱ぎ捨てた。

代わりに身につけたのは、残っていた風彩の兵に借りた、簡単な  
旅装。

長い黒髪だけが風にたなびき、唯一麗凜の生きてきた過去を思い  
出させるものだった。

どれほど先へ行ってしまったのかもわからない。

それでもなぜか　必ず会える、そんな予感が麗凜を導いていた。  
時を忘れて駆け抜け続けて、ふと見えてきた草原で、何かにいざ  
なわれるように馬の手綱を引いた。

頭上に見えた、星のせいだったのかもしれない。

「あれは……」

静かな静かな草原に、麗凜の眩きが滑り行く。

黄色い月に寄り添うように並んで浮かぶのは、薄桃色の星だった  
のだ。

そして視線を向けた先で、麗凜は瞳を止めた。

一人静かに佇む人影　ここからでは顔も見えないけれど……。  
草を食む馬の背を撫でるその人物に、麗凜はゆっくりと近づいて  
いった。

真正面に立った麗凜を見ても、その人は動揺も見せずに、まるで  
わかっていたかのような瞳を向けた。

「やはり 追いつかれましたね」

何かを観念したかのような鳳昇の顔に、麗凜は黙って頷いた。こうして向かい合ってみると、あの頃より視線が近く感じる。

ああ、そうだ 自分の背が、少し伸びたのだ。

昔、いくら願っても届かないようだった彼に、それでもわずかに近づいたように思えた。

十七年が離れた少女など、子供としてしか見られていないと思っていた。

それでもいいから側にいたかった。

でも、今は。

決意を込めたような麗凜の瞳を、鳳昇は静かに受け止めていた。

「あなた やっぱり周李なのね」

問いかけではなく、確信に満ちた麗凜の言葉。

鳳昇は、ゆっくりと微笑を浮かべた。

「またそのようなことを……私は鳳昇だと、何度も申し上げたはずだ」

そう言って、麗凜から距離を取るように、彼は歩みを進める。

その背中が少し遠くなるのを待って、麗凜は駆け寄ろうとした。

そして近づきかけたその時、草に足をとられたように、麗凜は小さく声を上げてその場にうずくまったのだ。

「足が」

痛そうに顔をしかめてそう呟いた麗凜に、あわてたように鳳昇が駆け寄る。

「痛むのですか？ そのように走ったりされるから」

言って、心配そうに彼が触れたのは、麗凜の左足。

それを確かめてから、麗凜は鋭い瞳で鳳昇を見上げた。

「左足が痛むなんて、言っていないけれど」

麗凜の言葉に、鳳昇はすぐに手を引いた。ほんのわずかな彼の狼狽で、麗凜は確信を込めて笑ったのだ。

「やっぱり……昔、落馬しかけた私をかばってくれたのは、あなた

だったものね、周李」

例によって周李の止めるのも聞かずに、無理な走り方をした自分を体ごとかばったのは周李で、その時、左足をひねってから、時々彼の注目を引くために痛むふりをしたものだった。

もちろん周李は本気で心配してくれていたけれど……。確かに二人しか知りえない記憶だ。

食い入るように見つめた麗凜に、動揺をすぐに隠して鳳昇は瞳をそらす。

「そんなことは、ただの偶然ですよ」

まだ頑なに否定する鳳昇に、麗凜は唇を噛んで立ち上がった。

「どうして……。どうして、そんなにまで否定するの？ もう私にはわかってる！ あなたが周李であるのは、隠しようがない事実だわ！ それなのに、一体どうして……！」

なぜだか悔しくて悲しくて、どうしようもない気持ちをついに麗凜はあふれる涙と共に鳳昇にぶつけた。

全身で彼にぶつかって、衣服の胸元を掴む。両のこぶしで何度も、何度も鳳昇の胸を打った。

「あの時……。守るって言うてくれたじゃない！ あの言葉は嘘だったとしても言うの？ 恋待星と一緒に見た、あの夜を本当に知らないと言うつもり？」

涙で濡れた頬もそのままに、必死で見つめた麗凜。心の底からの彼女の叫びに、鳳昇はついに耐えられないように顔を背けて、深い息を吐いた。

「守ると……。そう言ったからですよ」

苦しそうに発されたその呟きに、麗凜は顔を上げる。

彼女の瞳をようやく見つめて、切なげな表情を返した鳳昇は、夜空に浮かんでいる薄桃色の星を見やった。

「あなたを守ると、そう言うておきながら、できもしなかった。

無様に倒れ、あなたの命を危険にさらした。誰よりも大切で……。守るべき人を敵の手に渡してしまった。あなたを失ったと思った時、

自分を殺したいほど憎みました。すぐにでもお救いしたかった……それでも矢傷から体も動かせず、自分だけの力では何もできなかったのです。全ては、風鳴様がおられたからこそできたことだ。そんな情けない自分が、今更どんな顔であなたの前に立つことができると言つのです！」

叫んだ鳳昇は、今まで秘めていた心の苦しみを、堪えきれずに吐き出したように見えた。

別人として自分の前に立っていた時には見せなかった、彼の本当の心が伝わってくる。

「周……李」

何とも言えない気持ちで、その名を呼んだ麗凜に、鳳昇は力なく首を振った。

「それは、もう捨てた名です。今の私には過去も何も無い、風彩国の鳳昇だ。そうやって生きていくと、心に決めたのです。あの草原で、風鳴様に拾われたあの夜から」

「それでも、助けに来てくれたわ！ 私のために 危険をおかして、双龍国まで……そうでしょう？」

彼が黙って消えた時に、確信したのだ。自分を助けるために、何も言わずに、何も教えずに、全てをやつてのけた。自分の正体さえ、明かさずに。

そんなことをするのは、周李でしかあり得ない。不器用で、控えめで、自分のことはいつも後回しにしてきた周李。どんな時でも、麗凜のためだけを考えてくれていた、そんな彼でしか。

揺れる瞳で見上げる麗凜に、鳳昇は苦しい表情を濃くした。

「あなたには もっと他に、ふさわしい男性がきつといるはずですよ。私などよりずっと素晴らしい……」

彼の言葉は、最後まで続かなかつた。静かな草原に響き渡つたのは、麗凜が彼の頬を平手で打った音だった。

「麗、凜様」

驚いたようにそう呟いた彼に、麗凜は泣き笑いのような表情を浮



かべる。

「やっと……そう呼んでくれたわね。馬鹿な周李　いつも私の幸せを最優先にして……そんなに想ってくれるなら、どうして気づかないの？」

私がつつと待っていたのは、ただ一人。他のどんな男性ひとでもない。周李、あなただけだった……！」

言った瞬間飛び込んだ麗凜を、鳳昇はためらいながらもしっかりと受け止めた。彼の腕の中に、すがりつくように麗凜は身を寄せる。「あなたが過去を捨てると言うのなら、私だって同じだわ。今の私は、もう王女でも何でもなし。峰陽にも、双龍にも縛られない、ただの麗凜よ。。」

こんな私には、もうあの夜の言葉は……聞かせてはもらえないの？」

涙に濡れた麗凜の瞳を、鳳昇は信じられないような目で見つめ返す。

そして、ゆっくりと　彼は微笑んだのだ。昔のままの、優しい瞳で。

「ずっと……お慕いしておりました　麗凜様。私と……共に来てくださいますか？」

その言葉に、麗凜も静かに微笑みを浮かべる。ずっと、ずっと待ち望んでいた、愛しい人の最高の言葉に。

「ええ　周李。いいえ、鳳昇……あなたとなら、世界の果てまで　　！」

\*

天高く、恋待星の昇る頃、静かな静かな草原に、二頭の馬が並んで駆ける。

寄り添う影は、長く伸びて　恋人たちの行方は、星たちだけが知っている。

満点の星空を、あなたと見たあの日を忘れない。  
今も心に残るのは、初めての抱擁と、永遠の誓い。  
そして二人が夢に見るのは　懐かしい過去と、自由な未来。

## 最終話（後書き）

こちらは読みやすいように連載の形になっています。

改稿版と照らし合わせて読んでいただけると、応募前からどれだけ修正、加筆をしたのかがわかっていただけかと思ひ、興味のある方がいれば読んでいただければということ載せました。

読んでいただき、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5961f/>

---

馬駆ける草原に、恋待星は昇りて。（旧作）

2010年10月8日15時53分発行